

## 没句評について。

松橋帆波

競吟の選考は、選考時間の短さ、選出数の規定などにより、選考後に没にした理由を解説することは、困難を極める場合があります。そこで、ごく簡単に幾つかのカテゴリーに分類いたしました。

### 一、課題から離れている作品。

川柳マガジクラブ東京句会の課題は「表現自由」であります。それでもその言葉からあまりに遠い表現、作品は選出に無理があります。動詞・形容詞・形容動詞の課題の否定形についても、「否定形が主」になってしまっていては「課題」に対しての作品とは言えないと思います。

### 一、比喩表現に無理がある作品。

現代川柳は比喩表現を多く用います。また課題が「名詞」の場合、課題そのものを比喩として扱う場合もございます。しかしながら、その比喩表現が作者にだけ理解でき、選者や他の読者には一読して理解しがたい場合、批評・評論を行わない競吟の場にそぐわない事もあるでしょう。

### 一、説明的作品。

「～」は「～」だ。というスタイルで課題を説明するもの（辞書風）、または課題から連想される場面を解説するような作品は「川柳味」といった側面から、高い評価を得る事は難しいものです。

### 一、見出し風作品。

時事作品に多いのですが、新聞の見出しをそのまま用いたような作品で、現実の事象に対して作者の思いが見えないもの。「十七音字に揃えただけ」のものは、他の集句と比較してやはり上位に選出する事は難しいものです。

一、 同想作品。

集句の内容によっては、選出数の規定上、選ぶ場合もありますが、あまりに似ている着想の場合、どちらかの優劣をつけることは困難なため、佳句、秀句にかかわらず「相打ち」という処理をする場合がございます。

一、 既視感。

多くの句会で、また公募の場などで過去に沢山扱われていた表現・着想。作者にとっては、初めての着想であっても、題材によっては詠み尽されている場合があります。披講とは別に、活字になることを考えますと、入選させる事は難しいと思われます。

一、 誤字・脱字・送り仮名の間違い。音字数のずれ。

誤字・脱字などについては、直した旨を公表した上で選出する場合、発表せず、選者がペンを入れて発表する場合がありますが、あまりにひどい場合は、やはり選出することはできません。また、音字数についてであります「ずれ」としましたのは、披講によって、聞き手に意味が通じるか否か、という観点から、推敲の余地、添削の余地がある場合は、完成された作品とは言えず、選出の対象にはなりません。

競吟の選者は、絶対です。ですから、披講は堂々で行いましょう。読み上げる時は、アナウンサーのように五七五で切って読まずに、句の意味を考え、聞き手に伝わるように、役者の台詞のように読みましょう。

没句評は出来れば一句ずつ取り上げていただければベストですが、同じコメントが続くようでしたら、まとめて評をしていただいで結構です。

作品を作る時と同じように「伝わりやすい」という事を念頭にいただければと思います。

以上、没句評のご参考になれば幸いです。